The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴァージニア・ウルフの小説における「瞬間」と「パーティ空間」
Author(s)	太田, 素子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57875
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【54】

氏　　名	太（おお）　田（た）　素（もと）　子（こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２４０６６　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	ヴァージニア・ウルフの小説における「瞬間」と「パーティ空間」
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　玉井　暲 （副査） 教　授　服部　典之　　准教授　片渕　悦久

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、イギリス・２０世紀のモダニズム文学を代表する女性小説家ヴァージニア・ウルフ（１８８２－１９４１）を取り上げ、長編小説全９編を綿密に読み解き、その小説世界において展開する「パーティ空間」のもつ意味を考察した研究である。ウルフ文学においては、時計的時間が一時停止し至福の時が訪れる時、あるいはヴィジョンが啓示される時が特別な意味をこめられて「瞬間」と呼ばれるが、論者は、この「瞬間」というテーマは小説作品中のさまざまな場面で描かれるパーティと密接な関係をもっており、この「パーティ空間」こそウルフの特権的「瞬間」が示される重要な場であることを検証しようとする。本研究論文は、序、１２の章、結語と、注・参考文献から構成されており、総頁Ａ４判で２０１頁、４００字詰め原稿用紙に換算して約６００枚からなる論文である。

論者は、序章において、ヴァージニア・ウルフ文学をめぐる研究史をスケッチしたあと、ウルフ文学の従来からの重要なテーマである「瞬間」を検証するに当たっては作品テクストを綿密に読解するというクロース・リーディングをみずからの立場とすることを明らかにする。さらに、「パーティ空間」というモチーフへの注目については、ゲオルク・ジンメル、山崎正和、ウルフ学者クリストファー・エイムズらの先行研究者のパーティ論を検討することにより、西洋文学、英文学、そしてウルフ文学における「パーティ」についての研究の意義を確認したうえで、論者は、ウルフの長編小説を初期小説から順次論の対象に取り上げていく方針を語っている。

第１章から第３章では、ウルフの初期小説、『船出』『夜と昼』『ジェイコブの部屋』の三作を論じる。『船出』における孤独の中の「心の交流」と「昏睡」、『夜と昼』における「アフターヌーン・ティーパーティ」、『ジェイコブの部屋』におけるパーティが帯びる「闇と光のイメージ」などがもつ意味を考察し、その後の小説において展開していく主題と小説形式の萌芽が読み取れることを述べる。第４章から第１０章では、ウルフの代表作が産出された中期の小説三作、『ダロウェイ夫人』『灯台へ』『波』を取り上げ、「瞬間」の啓示のありよう、「瞬間」を捉える儀式としてのパーティ、そうしたパーティを描出する視覚的表象としてのイメージについて、それぞれ考察を加える。第４章は、小説空間に登場する“Here it is”の型の表現に、「ほら」「さあ」といった慣用的意味を超えて、老いと死へ向けて疾走する時計的時間が一瞬停止する至福の「瞬間」が、語り手を通して啓示的に与えられることを述べる。第５章は、クリストファー・エイムズの祝祭的意味を重視するパーティ観について考察する。第６章は、ウルフ円熟期のこれらの三小説において、パーティを通して「瞬間」を積極的に捉えようとする叙述を綿密に追跡する。第７章は、日常的なものがウルフ特有の「パーティ空間」に変質し、このとき、時間的なるものが停止して「瞬間」となることにおいて空間的に捉えられることを、部屋、扉、壁、窓などのイメージの分析を通して論じる。第８章は、個室と個我との関わりに論の焦点を絞る。第９章は、『波』に登場する６人の人物のアイデンティティ追求と「パーティ空間」喪失との関わりを考察する。第１０章はウルフ世界の基本構造をなす視覚的表現を分析する。第１１章と第１２章は、ウルフの後期作品、『オーランドー』『歳月』『幕間』の三作を取り上げ、『波』においてその頂点に達した袋小路的状況から脱出する試みとして「パーティ空間」が設定されていることを明らかにし、この空間表象のありようを分析・考察する。結語では、ウルフの小説にあっては時間的なるものを空間的に表象するモチーフとして「パーティ空間」が極めて重要な意味をもっていたことを重ねて強調して、本論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス・２０世紀のモダニズム文学を代表する女性小説家ヴァージニア・ウルフの全小説９編を取り上げ、その小説世界において描かれるさまざまな「パーティ」の表象のありようを綿密に分析し、この「パーティ空間」においてウルフ文学の極めて重要なテーマであった至福の瞬間の啓示という問題が捉えられていることを検証した注目すべき研究である。従来のウルフ研究では、なるほど「瞬間」への考察はしばしば研究の的となってきた歴史をもっているが、この問題を「パーティ空間」を掘り起こすことによりウルフ小説の特質を解き明かすという本研究は、まぎれもなく新鮮な角度からの興味深いウルフ研究として高く評価されねばならない。特にウルフ円熟期の三大小説に描かれる４つのパーティを取り上げ、『ダロウェイ夫人』は充足感を与える「パーティ空間」への回帰で終わり、『灯台へ』では「パーティ空間」に捉えられる「瞬間」には充足感とその消滅という両面が明確に捉えられ、『波』になると「パーティ空間」のはかなさ・もろさが描かれ

るようになることを述べて、こうした「瞬間」のさまざまな形の表象において小説家としてのウルフの力量が存分に発揮されていることを鮮やかに解き明かした論考は実にスリリングであり、優れて説得的である。本研究は、モダニズムの小説家ウルフの総体を大きなパースペクティヴから堂々と論じ切った優れた文学研究と言える。また文学テクストの言葉を丁寧に踏まえた考察は、本研究の確かさを保証する特質ともなっている。

ただし、本論文において疑問点がないわけではない。小説空間におけるパーティの分析において、イギリスおよび西洋社会におけるその文化的意味がどのように関わるのかについてもう少し考察を加えてほしい憾みが残る。また、先行研究の知見の紹介・導入の仕方にはいくらかの工夫が求められよう。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してなく、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。